

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名：社会学部・教授 打樋 啓史

研究課題：初期キリスト教における聖餐とその現代における影響に関する研究

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

20世紀以降、キリスト教神学界ではエキュメニカルな礼拝研究が盛んになり、その成果として各教派（プロテスタント諸派、カトリックなど）の礼拝式文が改訂され、充実が図られてきた。その中心となってきたのが、初期の教会における聖餐についての研究であるが、このテーマに関してまだ十分に解明されていない課題が残されている。特に、初期キリスト教におけるロゴス・キリスト論と聖餐との関わりは、これまでに示唆はされてきたものの、十分な形で研究は展開されてこなかった。

2015年度の特別研究期間、この「ロゴス聖餐論」という初期キリスト教の重要な一断面に関して、これまで進めてきた研究を整理し、さらに深化させることに専念した。具体的には、博士論文執筆を大きく進展させることができ、まだいくつかの作業を残しはしたものの、全体のドラフトがほぼ仕上がったことは、このようにまとまった研究期間を得なければ実現しえないことであった。博士論文の主題は、「聖餐とロゴス：初期キリスト教における受肉の聖餐論」である。4つの章から成る本論文の内、「第1章 ユスティノス」「第2章 エイレナイオス」「第3章 アレクサンドリアのクレメンス」は既に完成していたが、未完であった「第4章 オリゲネス」に取り組み、未読であった外国語諸文献を広く収集し、読み進め、考察を深め、大幅に執筆を進めることができた。

3世紀のアレクサンドリア教父であるオリゲネスは、聖書の比喩的解釈を展開した人物として、またキリスト教の霊性の基礎を築いた思想家として知られるが、彼の聖餐理解にもこのような比喩的・霊的神学の影響が顕著に見られる。つまり、第1章、第2章で取り上げたユスティノスやエイレナイオス、また4世紀以降のギリシア教父たちに比べると、オリゲネスの聖餐理解の強調点は、パンとぶどう酒に現存するキリストの体と血そのものに置かれるのではなく、その体と血がさらに指示するロゴスに置かれていることは明白である。オリゲネスの聖餐理解の中心には、「身体的リアリズム」よりはむしろこのような「霊的リアリズム」の思想があり、その意味で sacrament としての聖餐はそれ自体が最終的な価値を有するものではなく、あくまで究極的な霊的実在（ロゴス）に対する「比喩・しるし」に留まるものである。

博士論文では、この問題について、いくつかの面からアプローチし、明らかにすることに取り組んだ。特に重要なものとして、オリゲネスの思想においては聖餐と「聖書の言葉」が平行関係に置かれていることに注目しつつ、「 sacrament」と「言葉」のいずれもがロゴスとの関わりにおいて「しるし」であり、それらは互いに相補的な関係にあることを明らかにした。クルゼル、ド・リュバクなど、第2バチカン公会議の神学的基礎を築いたフランス・カトリックの研究者たち、またトリエセンのようにオリゲネスの聖書解釈について新しい視点を提示した研究者たちの仕事から多くを学びつつ、この点を整理した上で明確に提示できたことは、この研究の極めて重要な進展となった。

さらに、オリゲネスの思想における「形象・象徴」と聖餐との関わり、その聖餐理解の終末論的次元、「霊的な糧」という思想と聖餐との関わりなど、これまでの研究では触れられるだけに留まり十分に組み込まれてこなかった各テーマについても、考察を深めることができた。それぞれのテーマについて詳細に検討することによって、オリゲネスの霊的聖餐理解について、より多角的かつ重層的にアプローチすることができ、その本質により深く迫ることができた。これらは、具体的に博士論文第4章の各節として展開されている。

博士論文執筆と同時に、この特別期間中、実地調査と学術交流のためにフランスとインドネシアを訪れたことも、大きな収穫となった。フランスでは、現代のエキュメニズムのひとつの中心である、ブルゴーニュ地方のテゼ共同体に滞在し、その修道会の祈りと聖餐式に参加すると同時に、修道士たちや訪問中の神学者、聖職者たちとの対話を深めることができた。テゼはエキュメニカルな共同体であるが、そこで全体として行われる聖餐式は、基本的にカトリックのミサである。しかし、そこには様々な教派の人々がいることへの細やかな配慮がなされ、東方教会で大切にされてきた「祝福されたパン」が同時に分配されるなどが行われている。また、テゼのエキュメニカルな聖餐神学にとって、初期ギリシア教父の聖餐理解がひとつの土台となっていたことは、初期キリスト教の聖餐理解が現代に影響を与え続けていることの何よりの証左であり、これを体験的に発見できたことは極めて重要な成果であった。これについては、今後何らかの形で発表することを検討中である。

インドネシアでは、本学とも関わりが深いサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学神学部を訪れ、その教員たち、神学者たちとの学術交流を行った。とりわけ、「聖餐と教会」というテーマで、神学部で開かれた特別シンポジウムにパネリストとして参加し、現地の神学者たちと議論を交わすことができたのは、極めて意義深い体験であった。多民族・多文化国家であるインドネシアでは、キリスト教会で行われる聖餐式においても、各民族の基層文化の影響などが見られる。そこには、多様性という豊かさがあると同時に、それゆえに生じ、信徒たちが戸惑いを感じている問題や課題もあることを、他のパネリストおよびフロアからのコメントからリアルに知ることができた。このような、アジア的コンテクストにおける今日の聖餐の意義や課題については、今後のテーマとして、より本格的に取り組んでいくこととしたい。